

理科 第4学年 物のあたたまり方

自分の学級に合わせて直すプロンプト

下の枠の文を全部そのままAI（ChatGPT・Claude・Gemini など）に貼り、質問に答えると、この単元の学習指導案が自分の学級に合わせて直ります。枠の後半には、直す対象の学習指導案が入っています。

あなたは小学校4年の理科の授業づくりを手伝う役です。この後の「物のあたたまり方」の学習指導案を私の学級に合わせて直してください。先に学級の人数と活動の組み方、既習の内容と残っている記録、学習上の困難や必要な配慮、単元に使える時間と研究授業の位置、使える器具・資料・ICTと安全管理について、一つずつ質問し、私の答えを待ってください。答えがそろったら、問い「金属と水では、温まり方は同じだろうか」と学習指導要領の範囲、評価の観点を保ちながら、活動と支援を具体的に直してください。教科書の本文・挿絵・固有の問題は転載しないでください。未知の児童の実態や未測定の結果は作らず、数値には出典か私の回答を付けてください。安全に実施できない活動は、同じ問いを考えられる公的資料や記録へ替えてください。先生に渡す文に内部の識別番号やを出さないでください。元と同じ見出しの順で全文を示し、変更理由と根拠にした回答を最後に書いてください。直す対象の学習指導案は、この後に続けて書きます。

———ここから直す対象の学習指導案———

第4学年 理科学習指導案

1 単元名 「物のあたたまり方」

2 単元の目標

金属は熱せられた部分から順に温まり、水や空気は温められた部分が移動して全体が温まることを理解し、実物の観察・実験と記録を扱う技能を身に付ける。「金属と水では、温まり方は同じだろうか」を追究し、根拠を基に考えを表す。自分の記録を見直し、分からないことを確かめながら学習に取り組む。(A(2))

3 単元の評価規準

〔知識・技能〕①金属は熱せられた部分から順に温まり、水や空気は温められた部分が移動して全体が温まることを理解している。

〔知識・技能〕②実物の観察・実験と記録について、対象、条件や時期、調べて分かったことを区別して記録している。

〔思考・判断・表現〕①既習の内容や生活経験を根拠に、「金属と水では、温まり方は同じだろうか」について予想を立て、調べた事実と関係付けて表現している。

〔主体的に学習に取り組む態度〕①物のあたたまり方の学習で生じた疑問について、自分の記録や友達の考えを基に調べ方や説明を見直し、解決しようとしている。

4 指導上の考察

(1) 単元について

「物のあたたまり方」は、第4学年のA(2)を手掛かりに、自然の事物・現象を調べる単元である。中心となる理解は、金属は熱せられた部分から順に温まり、水や空気は温められた部分が移動して全体が温まることである。名称を覚えて答えるだけでなく、「金属と水では、温まり方は同じだろうか」に答えるために何を見て比べればよいかが授業の焦点になる。

本案では、金属と水の温まり方を生活経験から予想するところから始め、金属と水の違いを図で比較する活動を通して考えを確かめる。結論だけを先に提示すると、観察や資料が答え探しになるため、予想と理由を残してから調べる。単元末には身近な暖房や調理を学んだ性質で説明することで、学んだ言葉と根拠が結び付いているかを確かめる。

学校の既習と実態は資料だけでは決められない。前の記録を見て、説明に必要な言葉や道具の扱いを確かめる。扱ったことのない内容を既習として書き込まず、必要な確認を導入に加える。

(2) 児童について（学級の実態を書く）

(3) 指導について

本時では「金属と水では、温まり方は同じだろうか」を中心の問いに据える。金属に塗った温度で色が変わる材料の変化を観察し、熱する場所からの順序を記録する。水では教師が安全を確認した示温材料等で動きを観

察し、空気の温まり方の資料と比較する。色の変化と物の移動を分けて描く。

児童の最初の考えを消して正答に直させるのではなく、どの記録で考えが変わったかが分かるよう書き足させる。熱はどんな物でも上へ動くという予想には横向きの金属の結果を示す。金属自体が移動しているのか、水が移動しているのかを図の矢印の意味で区別する

資料を読むことや書くことが負担になる児童には、比較する箇所を絞った図、読み上げ、指差しや口頭説明を用意する。説明の代筆は児童に内容を確認してから行い、文字量で理解を判断しない。早く説明できた児童には、同じ説明が当てはまらない記録がないかを探させる。

安全と扱いの留意点は次のとおり。加熱器具は教師が点検し、保護眼鏡を着用する。顔を容器の上に出さず、実験後の金属や水に触れない。空気の流れに火や煙を児童が使う活動は避ける

5 指導と評価の計画（全8時間）

第1次 第1～2時：○金属と水の温まり方を生活経験から予想する。 評価：知①・知②（記録・活動の観察）

第2次 第3～4時：○金属を熱して温まる順序を観察する。 評価：知①・知②（記録・活動の観察）

第3次 第5時：○水の温度変化と動きを観察する。 評価：知①・知②（記録・活動の観察）

第4次 第6時：○金属と水の違いを図で比較する。 評価：知①・知②（記録・活動の観察）

第5次 第7時（本時を含む）：○空気の温まり方と関連付ける。○金属に塗った温度で色が変わる材料の変化を観察し、熱する場所からの順序を記録する。水では教師が安全を確認した示温材料等で動きを観察し、空気の温まり方の資料と比較する。色の変化と物の移動を分けて描く。 評価：思①（個人の説明・記録）

第6次 第8時：○身近な暖房や調理を学んだ性質で説明する。 評価：態①（記録の見直し・振り返り）

6 本時の指導（7/8（配当案））

（1）本時の目標

既習の内容や生活経験を根拠に、「金属と水では、温まり方は同じだろうか」について予想を立て、調べた事実と関係付けて表現することができる。

（2）学習過程

【導入】

学習活動：○前時までの記録から「金属と水の温まり方を生活経験から予想する」ときの疑問を取り出す。

○「金属と水では、温まり方は同じだろうか」

【めあて】調べた事実を使い、自分の考えと理由を説明しよう。

○一人で予想と理由を書き、調べたい点を確認する。

予想される児童の反応：・金属は熱せられた部分から順に温まり、水や空気は温められた部分が移動して全体が温まるのか確かめたい。

・前の記録と比べると違いが見つかりそう。

指導上の留意点：・答えを先に示さず、児童がどの記録を根拠にしたかを尋ねる。

・加熱器具は教師が点検し、保護眼鏡を着用する。顔を容器の上に出さず、実験後の金属や水に触れない。空気の流れに火や煙を児童が使う活動は避ける

【展開】

学習活動：○前時までの観察・調査の記録を使う。以下に示す調べ方を振り返り、本時は問いに関係する記録を比較する。追加の実験・調査は方法を計画し、次時に確かめる。

○金属に塗った温度で色が変わる材料の変化を観察し、熱する場所からの順序を記録する。水では教師が安全を確認した示温材料等で動きを観察し、空気の温まり方の資料と比較する。色の変化と物の移動を分けて描く。

○「どの観察結果から、そう考えましたか」

○自分の説明を相手に示し、根拠が同じか違うかを比較する。

○説明できない記録があれば条件や資料の読み方を確かめ直す。

○以前の記録や生活経験を使い、予想とその根拠を表す。

予想される児童の反応：・同じだと思ったが、比べるところをそろえると違いがある。

・この記録だけではまだ決められない。

・金属と水の違いを図で比較することで、理由を確かめたい。

指導上の留意点：・熱はどんな物でも上へ動くという予想には横向きの金属の結果を示す。金属自体が移動し

ているのか、水が移動しているのかを図の矢印の意味で区別する

- ・結果に合わない意見も記録へ戻る材料として取り上げ、発言した児童を責めない。
- ・比較が難しい児童には記録の対応する箇所を指し示し、まず事実を口頭で説明させる。
- ・本時に単元全体の実験や調査をやり直さない。比較する記録を準備し、方法を確認する必要がある部分だけを実物で示す。

評価：思① 既習の内容や生活経験を根拠に、「金属と水では、温まり方は同じだろうか」について予想を立て、調べた事実と関係付けて表現している。（個人の記録と説明。交流前後の変更理由を含めて見る。）

【まとめ】

学習活動：○本時の問いへの答えを、根拠となる観察結果とともに書く。

【まとめ】金属は熱せられた部分から順に温まり、水や空気は温められた部分が移動して全体が温まる。

○最初の考えから変わったことと、まだ調べたいことを記録する。

予想される児童の反応：・考えが変わったのは、記録を比べたときに違いを見付けたから。

・まだ確かめていない条件が残った。

指導上の留意点：・まとめは得られた記録の範囲に限定する。予定どおりの結果が出なければ条件と方法を見直し、実測結果を作り替えない。

・振り返りで分かった支援の必要な点は次時の活動に反映する。

・本時の重点は「以前の記録や生活経験を使い、予想とその根拠を表す。」であり、知識の結論だけで思考の評価を決めない。

評価：知①（まとめの説明）／態①（記録を見直す過程。発言回数や文章量だけで判断しない。）

（３）板書計画

上段に「物のあたため方」と本時の問い「金属と水では、温まり方は同じだろうか」。左側に予想とその理由、中央に実際に調べた事実の記録、右側に事実から考えた説明を置く。中央は条件・時期・対象が分かる見出しにし、比較する記録を同じ高さに並べる。金属と水の違いを図で比較する際に用いた記録を残し、根拠と説明を線で結ぶ。下段には確かめられたことと、まだ残る問いを分けて置く。発言の多い子の説明だけで仕上げず、個人の記録の違いを残す。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」(@mie_ai_katsuyo)

https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

